

山形短期大学民話研究センター資料叢書

続々 牛方と山姥

海老名ちやう昔話 第三集

編 武 田 正

続々 牛方と山姥

海老名ちやう昔話 第三集

夢見小僧
猿の胆
人柱の話
食って寝の男
王様と犬
三人兄弟
猿と狐と兎
石切屋と猫
坊さんのなまけお・か・た
荒くれ王子
鳩と鳥

32 28 26 23 22 16 14 13 12 10 5

正月と太郎

かわうそと熊

二人兄弟

長者と太郎

金が蛙になつた話

兄弟と貧乏神

親孝行

折れ秤

吉相

あとがきに代えて

白鷹における昔話の伝承とその周辺

58

56 55 53 50 48 44 38 35 34

凡例

- 一、第三集の編集は第一・二集と同じ方針である。
- 二、話の順序は聞きとりの順序とした。
- 三、表記については、できる限り昔話の話し方に
よったが、一、二、どうしても表現できないもの
に限り改めたものがある。

話者

海老名ちやう

八十一才

山形県西置賜郡白鷹町折居

夢見小僧

あるところに、親孝行な息子がいて、父に早く別れて一人の母を大切に、親に早く別つてがら、貧しくなつて山働きなどして親を養つていた。そうすつじど、ある日、山さ行つて青物あおもはいっぱい採れて、知らず知らず暗くなつて、そして夕方雨なの降つて来たから、

「いや、帰らないであまり悪いげんど、今日は許して呉くろ」

というもんで、家の方さ手合わせて、一晚泊つた。そしてその岩あつけほで、に、その岩の片端さ、こう岩を枕にし

て寝て、採つた青物で固めて、雨濡んねようにして寝て、夜中に何か音がすつから、誰か来たかなあと思つて、耳立てて聞いっただば、岩の中で話するようだとて、岩さ耳ひつつけつたところが、人の声のようでもないようだけれども、

「あそこの村では、水は不自由で一所ひとところしかなくてもう一所、村の真中に柳の木がある。その柳の木は水を吸っているために、うんと勢いええ、あれ見つけらんねもんだもなあ」

という音すつこんだ。

「ああ、これはええこと聞いた」

と、一生懸命でこうして耳立てていた

ころが、

「なして、そがえな話や夢なの…」

と聞かなかつたて。

「いや、おれは確かにあそこに、水できるといふ話きいた。おれさ、百両で掘らせて呉^くろ」

「水なの出つこんだら、百両でもなんぼでもええげんども…」

「まず、おれあ一人では掘らんねから、できないときは仕方ないげんども、どうか少し人夫出して呉^くろ」

と、人夫もらつて、掘つて、そして柳の木の下見たれば、水出っただけど。それから柳の木移さなくてわかんねべから、

みんなで人夫をいっばい頼んで、ヨイヤイ・ヨイヤイとむくしてみたところあ、段々に湿つてきたど。

「いや、こんどは確かに水出んべ」

と思つて、それから穴を大きく深くしてみんべと思つて、そのうちに水づいて来たり、水少しめめくつて来たほでに、確かだべと思つて、そこあたりを綺麗にしたりして、朝げに明るくなるばかり待ちて、その人行つてみたところあ、きれいな水は、いっばいになつて流つていたつけど。

「これは、ほんに、みんなに喜こばつて、百両の錢をもらつて、おつかさどこ喜こ

ばせて」

そしてまた、金屋じいさんさ行つてみたところあ、

「じいさん、何しつた」

というたらば、

「いやいや、家はむくれつかと思つて困つたもんだ。雨あ降るじど、かくれ家もなくて、何としたらええんだか、建てる勇氣もなければ、何としたらええんだか」

と口説き始めたど。

「ほんじゃ、この家をおれに売んねえか」

「こんな家買つて何する」

「いや、むごさいから買うから、なんぼ

に売る」

というたらば、

「八十両にだら、おれあ暮さんねべか」

「ほんじゃ、百両に買うから」

というたば、喜こんでその百両で小さい家を建てて、自分の暮される錢残してゐる。

それから今度、片附けてみたところあ、昔竈つくつたらしいところに、いろいろなもの上げていたつて。それをまず皆投げたりなんかして、そこを掘つてみたところが、カチンと鍬の先に手答えあるから、それを掘つてみたれば、甕さ金いっぱいだったけど。これを喜んで、おつかさ

どさ持つて来て、喜こばつで、それから今度、あのええどこの旦那衆さ行つて、まずお前の家、こういう風だという話を聞かせて、そうして、なじよな家だから廻つてみたば、娘の大事なの、寝ててなんとも仕様あないということだけでもなあ。

「さあ、ほんじやらば、おれにまかせて呉れないか」

というたば、

「生かしてさえも呉れれば、なじよにもして、家なの、ええ」

と。それから木なの、ぐるりさあるもの切つてみたば、陽はさして来る。そし

てモクモクと木の下あつどこ、油で焚いて、ムカデざあ毒があるというから、油鍋を、ここさ、二どこ三どこ置いて、油を煮たてて、みんなに箸を持せていたところあ、ムカデは大きいなに、小っちゃいなに、チヨロチヨロ出てきたけど。それをみな油鍋さ入つたところあ、

「いやあ、お天道さま見た。いや、ええこと」

なんて、その娘は起るようになった。そして今度、みんなを喜ばせて、おつかさんも喜んで、親孝行すつじど、そういう風なええことというものは、神さま教えておくやるもんだ。

猿の胆

ある人はその話聞いて、やっぱし、山さ行つてそのどき泊ったど。そうしたところか、やっぱし夜中に音すつから聞いたっだらば、

「ああ、正直なええ親孝行なものさ、みんな教えてやつてええがった。誰も教えたいげんど、教える者あいなくて困つてあつた」

ということで、そんではあ、その人はそのまんまで、聞かねで来たど。んだから親孝行すれば、みんな、天知る地知るで、親孝行はすんなねもんだど。

亀の子ども出つどこだと大喜びしたとこだけな。そうしたところあ、亀のおかた言うには、

「この子どもは、猿の胆食わねじど、満足に生まんね」

と口説くごんだけど。

「どこの島には、猿島ざあある。そこさ行つて、ほんじゃ猿の胆、おれあとつてくる」

と行つたところあ、やっぱしその猿島は、まず木の芽も何も吹いてないくらいになつて困つていたど。猿に、

「いやあ、海の中にはいっぱい木あ生えて、実はいっぱいになって、なんと食う者あなくて困っている。おれあ。そういうどこさ行ってみねか」

というたところが、

「そんがえにええどこ海にあるか」

「いや、海だつて陸だつて同じだ。おれあ背中さたぐりついてあえべ」

というたところが、やっぱし見たところ、木なんつあ無くて、海の草なのばりあつどこさ連て行つて、

「海に木あるざああんまい、実はお前の胆もらいたいから連て来たんだ」

と、猿さ言うたところが、猿は、

「なんだ、木に登っているもんだから、胆なんていうのは、木さ下げてて、おれあ体に胆なんていうものはない」

「さあ、ほんじゃらば、胆とりに行つたらええでないか」

と、亀さ向つていったど。

「ほんじゃ、その胆をおれあもらいたいんだから」

と、また背中さのせて、

「胆、まず一つ呉ろ」

というたら、

「木に胆ざあ下げておくまい、体の中にしか胆ざあないもんだ。お前は間違つてる。お前はおれどこ、だましたから、お

れもだましたんだ」

と。しぶしぶ亀は帰つて来たど。

人柱の話

あるところに、橋を架けなくてなんなく、荒れ川で橋架かつぎあなくて、みんな寄合ひして、

「なんとしたらよかんべ」と。

「人柱に立つと、そういうときは何かに、上手になるもんだ」

といった人がいだつたそうだ。

「ほんじゃらば、誰か人柱に立て」

と。誰も立つ人いないもんだ。そしてらば、

「その、語つた人は人柱に立て」

と、こういつて、その人はとうとう人柱に立たせらつではあ、殺さつでしまつたど。

そして何年かもよつてから、その家では川の向いから、嫁もらつたど。そして、その嫁は仲々、呼ばらつでも「はい」というだけで、決して喋しゃべんね嫁で、これならば、置いっだたて楽しみもないから、返すと、親が連せて行つたところが、その橋の上に立っているうちに、キジは飛んで来たの、橋の上でギャツと音立

てて飛んだつて。そうしたところあ、狩人に、そのキジは打たつじやど。そうしたところあ、その嫁が、

口ゆえに、みのの川原の人柱

キジも鳴かずは打たることなかりけり

と、その嫁がいうたそうだ。そうしたところが、親は考えて、

「こりや、決して余計な口ざあ立たないで、こういうことを考えるくらいでは、仲々な嫁だ。返すなんていうことはできない」

と、また連^せて来たど。口はわざわざいのもとで、その人だつて人柱に、口さえも

立たねど、なつことなかったべし、キジだつても鳴かねければ、打たれることなかったべど。

んだから余計な口ざあ立たない方がええど。

食つて寝の男

あるところに、たいそうなまけ男がいて、それは稼ぐは嫌いで、寝ててかまわず食つて後には、自分は食^かせてもらつて食いたいくらいな男だつたど。そうすつじど、その男はそがえにして食つてもいらんねんだし、後には干死^ひんだど。

「お前はあまりなまけて来たから、猫に生れ返してやる」

と、エンマ王が言うたど。そしたば、「そいつもええげんども、一つ聞いて呉^くろ、真黒な猫に、口ばしと鼻ばし白くして、猫に返してやって呉^くろ」と。

「なんのわけで、そうだ」

「寝ころんで、かまわずいるじど、団子だと思つて、たしかネズミが、これはうまいと思つたら、すぐつかまえて食うから…」

と。エンマ王もあきれたど。

王様と犬

ある王様のところに、—その王様はうんと馬好きで—馬さのつて部下つけて一日遊んで来て、明日もまた遊ぶから、かまわず置いておけはあと外さ馬さのせる馬具も外さ置かせていたど。そしたらその晩、雨あふつたところあ、みな犬に喰いつかつたて。その馬具は牛の皮だったもんだからめちやくちやにさつたど。

王様、朝げに起きてみたところあ、その通りだほでに、まず怒つて、みな犬を殺してしまえと、触れたど。そうしたところが、どこの犬もみな、見つさえすつ

ど殺されるもんだから、こんどは一匹の犬は、野に大した犬の先立ちになって、犬訓練しているの이었다そうだ、そこさ行つて、犬の王さ、

「困ったもんだ。おらだ見つさえもすつど、王様に殺される。何としたらええがんべ」

と、犬さ行つたつて。

「はあ、そんではおれあ王様さ行つて話してくる」

そして、門開くばり待ちて、入つて行つて、

「ああ、犬あ入った」

というもんで、大騒ぎする。そして王

様の隙ねらつて縁の下から、王様の坐つていた下さ行つて、

「そつちにいた、こつちにいた」

というげんども、動くざあないんだど。んだから、何とも出すことできないんだど。王様は、

「何かあるには相違ないから、その犬、王様来いというて、音立てて連て来い」

と。そついう風に犬さ言うたところあ、犬あ出はつて来て、王様どこさ行つて、ちゃんと坐つて、

「王様、おらだ家来を、みな殺すなんて、とんでもないごんだ。まずどの犬が食つたか分つか」

というたら、王様は、

「ああ、しくじった。どの犬だか分んね」

「そんなこと、人間だつてするもんでない。まずここさ、羊の乳と草葉を、ここらの揉んで、その中さ入つて、飼つてた犬に食せてもらいたい」

というたところが、その屋敷にいた犬をみな呼ばつて、混つていたものを食せたど。そしてところが、みな腹の中に入つていたのを出したど。そして、その皮みな出てきたど。

「罪のない者ばり殺して、こういうもんだ」

と。それで王様も犬さあやまったど。

畜類は猫でも何でも、腹から返すときには、草葉など食うでつしやな。

三人兄弟

むかし、王様、三人子ども残さつて、おとしこ男子。おかたに早く別つたど。こんで、王様は三人の子どもも一人前になつたし、嫁もとつて呉れなくてはなんねから、と思つて、三人の子どもを呼ばつて、

「お前のおつかさは仲々しつかり者で、手の先も器用だったし、おれの片腕にもなつて、欠点のないものざあないげんども、ええなだった。んだから、妻という

ものは、ええ妻を持たなくてはなんねえから、一番とええ妻を持ったのを後継ぎにすつから、妻をえらんで来い」

と。ところが、一番兄は氣むずかしいような、二番目はハイカラな氣持、三番目は大人しくて、人と應對するも嫌いなもんだつたど。その二人の兄と次の兄は、「おかたえらぶごんだら、なんぼも町さ行つて、そうしてなんぼもええ女もいる。あれをおれあ目つけつた」

なんて、喜んでいたつけ。

「んじゃまず、青芋一把やつて、これを三日うちに續んで来る者を、どれええあんなばいに三人のうちに續んで来つか、こ

れ持つて行つて續ませろ」

と。そうしたところが、一番末子は、

どこさも行つたことないんだし、これは、

「おれあ、そがな人見たことない」

なんていうても、兄弟さだても恥入るごんだし、と思つて馬さのつて、まず行つたば馬は山さ登つた。馬の足の向き次第で山さ行つたずうもんだ。

あとの二人は町さ降つて、自分の氣に入つたおかたさ持つて行つたし、みな喜んで王様の嫁になられるというもんで、
「ほんじゃ、おれあ續むから……」

なんて、二人の兄どもらの女衆。末子は、

「なんとしたらええんだか」

と、馬の足の向き次第、山さ行つたところあ、むかし城でもあつたかと思うところ、馬は休んだ。そこを降ちてみたら、大きな石のあるところさ腰かけて、「なんと、こがえなところにももないんだし、どうしたらええがんな」と、一人口たつていたら、ネズミは石の上さあがつた。

「何を語っている」

と、ネズミの話。

「おれは、こういう風にして、兄弟衆三人がいたげんど、おれはどきも行くよう知らねんだし、なんとしたらええか、ま

ず兄弟にだつて見放されんだしと思つて心配して、ここにいたとこだ」

といったところが、ネズミは、

「そういうことだれば、おれあ手助けすつから」

「その三日のうちに續ませて、上手に續んだのを後継ぎにさせるといわつじや」

というたば、

「んだば、その糸を置いて行け」

と、こゝろネズミはいうた。それから今度は喜んで、三日目に行つたところが、「この箱、持つて行つて呉る、箱の中さ青芋撚つたの入れた。まず家さ行かねうちは開けないで呉る」

といわつたど。

一番大きな兄と、中の兄が持つて来て、親さ見せたところあ、

「これは、まず、雑魚とり網にもわかんねような編み方だ。こげなもの…」

と、二人の兄どもら言わつていだつけど。そして三番目が箱突出したところあ、「これはまず綺麗に上手に績む者もいたじだな」

といわつたど。

「んじゃ、これでうちの母はみな機を織つて着物拵えて、器用なお母さんだった。それくらいなことさんねの、分んねから…」

というもんで、一週間うちに機織つて来いと言わつたから、兄たちは、

「これで機織れ」

と、ええどこの娘なの、学問なのあつけんども、そげなことしたことない。んだげんども、王様さ嫁きたために、何でもかんでも、編みつけたと。こんどはまた末子はそれを持つて、

「ネズミよ、ネズミよ」

と呼ばつたところが、出はつて来て、

「これ、一週間うち、機織れといわじや」

「ほんじゃ、なんでもかんでも織つてやる」

と、こんど一週間もよつてから、また元通りの箱さ入つて持つて来た。

「兄どもらの機は役立たない。そしたば一番末子のは本当にきれいだ」

と賞めらつじやど。そしておかたが王様さ見合いとなつたど。そうしたところあ、何とも仕様なくて、

「ネズミ、こういうわけだ。ネズミよネズミ」

と呼ぼつて話をしたら、

「おれは、実は隣の王さまさ嫁入りしろと言わつじやげんど、よくよく嫌^やんだくて、聞かないで、魔法に掛けらつて、こういう風になつてゐるんだ。その魔法に

掛けらつじやの、みんな笑うようなことになれば、魔法を解くと言わつじやげんど、なじよな方法ええかと、おれは考えていたとこだ」

というどこだど。

「ほんじやら…」

というて行つたら、鳥屋に行き会つたど。鳥屋も親切な鳥屋で、

「オンドリを、どうかおれどさ売つて呉^くろ」

というど、オンドリさ何かお花など飾つて、ネズミがそれにのつて、魔法掛けらつじや家さ行つたところが、
「いや、珍らしいものは来た」

というもんで、掃除してた下女どもら、家さも寄んねで、

「ああ、珍しいもの来た」

と、アハハ・アハハといったど。そして魔法かけたおばあさんが出はつて来て、

「何をいうてる」

「珍しいもの、まずオンドリの珍しい様子して来たごど。そいつさネズミなのって、踊りなのおどっている」

というもんで、うんと笑っていたつけど。そしてところあ、魔法かけたばあさん、

「おお、珍らしい、あらら…」

というもんで、大笑いしたど。

「こういう風だ」

と、ネズミがいうたところあ、

「魔法を、おれあ解く、お前は親のこと
も聞かないで、王様さ（嫁に）行かない
ので、こういう風になった。ほんじやら
ばその王様さ行くように魔法解いて呉
れつから」

と、とてもええ、元通りになったど。

そして今度はその王様さ行つて、見合い
ということになったど。ところが、

「ネズミは何として来るもんだか」

と思つて心配したところが、一番も
んだつたど。それを貰つたど。

んだから、おかたのええのもらわねど、

駄目だど。

猿と狐と兎

山奥に三匹のケモノあ住んでいて、その三匹は猿に狐に兎、三匹仲よく住んでいたど。

あるとき、三匹は言つて、

「人間さあええもんだな。人間になるよ
うできねえもんだか」

というたところが、兎は、

「心さえもきれいで、人をだましたり、
いろいろしたりしないごんだらば、同じ

だべな」

と語つていたときさ、年寄りのじさま
が棒ついで、今にも倒れそうに來たど。

そうしたところが親切にして、それを助
けて、まず何も食^かないで、こがえになつ
て來たべから、おらだ、一生懸命で栗で
も拾つて來たり、食うものでも、御馳走
したりしたらば、人間になれつからと
思つて、一生懸命で猿と狐は運んで、焚
物など焚いて当てたりしていたど。その
うちにとにかく飽きてしまつて、
「おらだばり、食せていらんね」
いや、こうだあだということできて、
いよいよ、

「兎、お前、働きもしないで、兎ぐらいにそんなええ心持たないものはいない、なんて言うから、それは出来たことだ」

そしたば、兎は、

「いよいよになった時は、おれにも覚悟がある」

と。そして今度は、その狐・猿なの、自分ばり食つておじいさんどこ養わないようなありさまを見て、

「おれは、まず行つて探してみたつたて、そがえに出来ないんだしなあ、いよいよになったらば」

と思つて、火どんどんと焚いて、こいつ、体を進ぜたらば、三日四日は生きて

いるべと思つて、その火の中さ入つたど。そしたば、火は。パツと消えてしまつたど。そしたらば、その年寄りは、

「健気な心だ」

と。その兎を抱いて、ふうつと消えてしまつたど。そして今、お月さまさ行つて養つてゐるんだど。

んだから、本当に立派な心持たなくてはなんね。

石切屋と猫

石切りしていたところさ、ネズミはちよこちよこと遊びに来て、

「石屋さん、何かうまいもの食いたくないか」

「うまいものなど食いたいな」

「おれが昔ある占いさ聞いたことある。おれあ、おれあ金持ちの商人が生まつて来たということ、陰で聞いたことある。おれあ、んだほでに、金のあるところなんぼも知った」

というネズミだけだ。そしたば、

「なして、どっから引いて来んのか」

「いや、どこに、金があるじだか、おれ、金見つけられるな」

と、ここのうけど。

「そうか、ほんじゃ、持って来てみる」

というたところが、金くわえて来たど。
「こいつで何か買って、おれあどっから引いて来たんであんめえな」

「引いて来たんでなくて、おれあ見つけて来たんだ。誰あ何でもないから……」

というもんだから買って来て、時々楽しんで、石切りもいたところが、猫あ来て、そのネズミ見つけて取らんとしたところが、

「いや、猫さん、おれの体一食い食ったところで腹くつちくなるまい。長い間友達ちになつて食べたらええでないか」

て。そして猫あ来て、余計にばり食つて、ネズミには食うどこないがったど。

また一匹の猫も腹減らして、子どもを持たげんども、思うように食うものはない。それにも食せたりしたところあ、まずネズミは痩せて痩せて、石切りとこさ行つて、

「石切屋、とっても二匹に來らつでは、おれは体もつきたし、なんとしたらええか」

というたら、石切屋は、

「水晶の箱、おれ持った。ほんじゃ、お前はおれどこ、うまいもの食せたり、いろいゝろして、そがえに痩せてはいらんねんだから。猫になど食せねつたつてええんだ。この水晶の箱さ入っている」

といわつて入つていたところあ、猫は、「ネズミなんとした。あがえに一食いにして呉れんべといたところあ、今まで許していたに、こがえなことならば、おれあ一食いにすんべ」

といつて、來たけざあ、ネズミは水晶の箱に入つていたもんだから、ネズミどさ話したげんども、

「こんどはうまいものは、お前どさ呉れらんね、猫の子いっぱいあつたらば、そいつでも食つたらええがんべ」

というたところあ、ごしやえで、その猫は食てくれんべと思つて、アツと頭を水晶の箱さぶつつけて猫は死んだど。い

ま一匹もその通り、そがえな一食いにしてくれんべと思つて、思い切つて来たところあ水晶さぶつつかつて、死んだど。んだから、唯食うべとは思つていらね。

坊さんのなまけおかた

ある坊さんに、なまけおかた持つて、なんともまず、かまわず働いてばり居んなねような坊さんがいだつたど。

あるとき、そのおかたが言うには、
「おれは病氣だげんども、お前働き悪れもんだから、おれあ医者さも掛らんね。

そんな働きの弱い者は困つたもんだ」
というもんで、坊さんき言う。そして坊さんがどこさか托鉢にでも行つて、そしておれのところ医者さでも掛けてもらわんなね、とおかたに言わつて、坊さんがある時、托鉢にでも行つて貰つて来る他ないべなと思つて出掛けたど。そしてそつちこつち歩つて、たくさん金も貯わえたし、また袋さ米も頂いたからどて、帰つて来る途中で山さ昼寝したところが、水も飲みたくなつたど。そしてその袋から水飲むのを出して、水飲みに行つたど。そしてところが、蛇が知らねうちに袋さ入つていたど。それ知らねで背負つて来

て、なんだかどんどんと町でお堂の建っているところさ入って行く人がいたので、

「何事だ」

と聞いたところが、

「ある大和尚の説教で、うんとこちらの人は盛にお聞きして仕合せになつていた」

という話聞いたもんだから、

「おれも聞かせてもらいたい」

と思つて、その坊さんも入つていったど。そうしたところが、いろいろな話聞かせておくやつて、その坊さんどこさ指差して、

「お前背負つて来た袋に蛇入つていたか

ら、おれどこさ持つて来い」

「蛇は、おれは背負つてきたわけはないなあ」

と思つたげんど、その坊さんがもつて行つて開けてみたらば、黒い蛇がノロノロと出はつたど。

「この蛇はお前、あまりええぐないおかたに持つて、とにかくなんぼ働いてもわかんねがら、この蛇はおかたの生命をとつてくれるということど、入つていたのだ。ほだから、この蛇さよくと聞かせてやるから、お前のおかたもおれの説教を聞くように、連れて来て説教を聞かせろ」

と言わっじゃごんだど。そしてその話を、おかたさ言うど、

「そがな説教なの、おれあ聞かねったつてええ」

というげんども、ビリビリと聞かせて、大和尚の前さ連^せて行つて、

「働かなくては食うべからず。夫と一致して働くと楽しみもあるし、自分が我侭語つていらんねから…」

と教えらっじゃなで、感心して、ええあんばいに送った。なまけていると、ええことになんねえから、なまけないで働かんねと、大和尚に教えらっじゃど。

荒くれ王子

ある国の王様の息子に、とにかくあばれ王子が出てきて、何とも仕様なくて親も心配していただつたそうだ。

ある日、みんな家来どもを連^せて、

「みんな水浴びにあえべ」

と、川さ連^せて行つた。

なんだか、今日は雨も降るし、荒れ模様だからまず行かね方がええでないかと、言うげんども、その王子は聞かなくて、
「あえべあえべ」

というて連^せて行つたところが、やつぱり荒れて来たど。それで、

「おれの後さ続け」

というもんで、川さ入って行つたど。

それでもみんなは、そういうこと聞かねつたてええから、おらだは帰れというもんで、王子ばり川さ入れてみな逃げて行つたど。王子はそのうちに荒れてきて、流つて行つてしまつた。王様は、

「なんとして来た」

「王子様は帰つて来たものとして、おらだは帰つて来たが、まだ帰んねが、こんな時は早く帰れというたから、先に帰つていたでねえかと思つて……」

というようなあんばいで、まずみんな口止めしていたど。そうしたところが、

太つとい木あ流つて来たのさ、たぐついで王子様は流つて行つたど。ところがその木さオームに蛇とネズミと上がつていたど。そいつさたぐりついたところあ、ある坊さんが来て、その木を引っぱつて岸に上げて助けてくれたど。そしたところあ、オームは、

「いやいや、助けていただいて何か恩返しなくてはなんねえから、いつでも上げつけんど、それでもおれあ、宝というたつて、銭と米ばりだ」

と、坊さんに言うたど。蛇もそういうし、ネズミも、

「こういうところに住んでいっから、不

足なときは来て、音さえも立てておくやつじど、おれあ恩返しに行く」

と。そしてその王子だけは、その坊さんとこに置いてもらつて食せてもらつていたど。そうして家さ帰るといつて帰つて行つたど。そして今度は、まず畜類ななどは、なじよなもんだかと思つて、人間がありがたいという口も立たねで帰つて行つたど。

そのあと、坊さんは、それぞれなじよしつたかと思つて行つたど。

「ネズミよ」

といったところが、ネズミは来て、「ありがとうございました。恩返しに何

あげたらええがんべ」

「いや、マメでいたかどうか、おれが食^かねくなつたときには、願ひに来る」

蛇さ行つたところが、蛇もノロノロと出はつて来て、そういう。オームさ行つたときも、

「ありがたかつた。恩返しに何か上げたい」という。

「いや、おれあもらいたくて来たでない。まず無事でいたかと思つて、おれあ諸国を廻つて助けて歩く人間だ」

と、坊さんがいうたど。そしてある時、諸国廻つて歩つたところが、王様は死んで、後を継ぐところで、大したその国での

祝いをして、象さのつてされるだけ贅沢なこととして町を廻るごだけど。そしてその坊さんが橋の上に立つて見つたところ、あつちでも見つけて、

「あれを生かしておけば、おれのためでない。おれどこ助けて呉^くつじやな、おれどこさ何か欲しくて来たには相違ないから、あれを生かしてでは駄目だ。あれを殺せ」

という命令かけたそうだと。そうしたところあ、

「おれは生命はいたましくないしするげんども、お前の方は、聞くと王になるのは、おれが助けた者だそうだが、あんな

者に政治とらつじやら、お前だどうするごんだ」

と、まず大声でいうたど。そうしたところが、

「むかしから、おらだ、荒れん坊だったということ聞いたった」

というような話で、

「ほんじやらば、あんがえな者に、政治とらせていらんね」

というもんで、ヤアヤアと話するなで、引ずり落さつて、どこさか身を隠してしまつたど。

「ほんじやらば、この方から政治、ええあんばいにとつていただけたら、おらだ

助かる」

と、その人をのり物にのせて、村き顔見せて、その人に政治とつてもらったぞ。
んだから、恩を忘れるようなものに、
いい政治はとらんねど。

鳩 と 鳥

あるところに、ええ地主があつて、毎日お客様なもんだから、料理人一人かかえったそうぞ。その料理人が心の柔しい親切な奴で、鳩を、通し来つから、鳩の住場、グシの下さ拵えてけつじえ、鳩も喜んで飛んで行つては夕方帰り帰り、そ

ういうとこ見て、鳥は、あるとき軒場の下さいたぞ。今度、どんな友達に鳩は鳥を連て来つたなと思つて、その料理人が、鳥にも住場を拵つてけだぞ。鳩は立派なもんだから、二匹で騒いで、ものを食つては帰り帰り、あるとき、鳥は腹病みしたぞ。

腹病みで今日は働きに出きらんねど鳩は見つだもんだから、この家のうまいものを食いたくて、腹病みしてる恰好なのがわかつたぞ。

「おらだも毎日働いて来ては、泊り泊りしてな、働かないではええことざあないから、働きにあえべ」

「おれは腹病めて行かんね」

という。鳩は餌探しに行つて、餌いっぱいつめて帰る。鳥はそれを、

「今日は何か、あまりうまい匂いするからます…」

と、腹病みという嘘語つていたところが、家の中ではうまい料理はじめる。料理人が、こんどは包丁砥ぎに外さ出はつたところを、台所さ行つて鳥は食つていた。そうしたところが、入つてみたところが、鳥が皆突つついて食つてしまつた。そこでこんどは怒つて、

「その鳥を、おれは親切にして、^{ざっぱ}糞把でも何でも食せる。そこでこげなええもの

を食うざあない」

というもんで、ごしやえで、皆赤むくれにして塩水さつけて、こんどはガアガアと啼いて、ぶん投げらつてしまつた。鳩は、

「あれくらいに働いて、余計なところもらつたら、ありがたく食うこんだらだげんど、働かないで、臍腹つかつてゐるなんて、間違つてゐる。おまえはええ心もたないからだ」

というもんで。そのうちに鳥は死んでしまつたつて。あまり咬いこととして食うべと思うと、間違つてゐる。鳩は立派だから、いつまでも飼わつた。だ。

正月と太郎

御主人があるところにいて、大晦日から、そこに感心な太郎という使つていた者がいて、

「今日、太郎、大晦日だから早く帰って行つて、ゆつくり休んで、明日早く来い。

戸開けつどき、ドンドンと叩くじど、『誰か』とおれあ言うからそんな時、『福の神』だといつて入つて来いよ」

といわつて、行つたど。

そして今度、鶏も唄つたし、太郎も来るべなと思つて、主人が待ちつたど。太郎も早く来いと言わつただから、行くべと

思つて仕度して立つて行つて、ドンドンと戸を叩いたらば、旦那が戸を開けた。

「誰だ」

といったところが、

「ああ、太郎だ」

と、こういうてはあ、太郎だといわつて、戸を開けねわけに行かねから、戸を開けたば、太郎はなんだか早かつたとも何とも言わなかつたし、なんだか機嫌が悪いなと太郎は思つたど。

で、若水も汲んで、

「金汲む、よろずの宝汲む」

と宝の水を汲んで、それを釜さ沸したりして、食うものを煮たり、朝の雑煮に

かかったところ、何つけかにつけ太郎に
当る。そして今度、お酒を飲むとき、太
郎は考えたど。

「おれは福の神だと言わねえから、面白
くないのだ」

と、おれは福の神だ。

そして、酒を飲むとき、ちゃんと坐つ
てから、

「おれが福の神だ、さようなら」

というたど。旦那は「待て待て」とい
うたげんども、縁起ばかりかつぐ。こんな
福の神なんて、情ない旦那だと、帰つて
行つて、福の神だと言わねばりで、逃げ
らっじやど。んだから、縁起ばかりかつが

ないで。

かわうそと熊

ある山の一軒屋に、山の川を利用して、
粉屋一軒あつたて。その粉屋の御主人が、
立派な人好しだほでに、うんと流行つて、
うんと人を使つて働いたど。そこさ、あ
るとき、変なものがチャンと顔面出して
見てるものいたど。カオスだつて。

「いやいや、カオス、とんだもんだ」

それ見ないふりして、まず川を利用し
て粉はたきしていたのだから、カオスさ
何か言ったり、またいたずらをすつど、

なじよな目に合うかわかんねからと、見
ね振りして毎日毎日それえ調子にして、
見に来るど。あげくには、トコトコと入っ
て来て、火なのあつどさ来て、当つてな
のいるど。そうすつど、みんなは何とし
たらええんだかと言うげんども、その粉
さ、いたずらされだり、いろいろしても
困ったんだし、またこの川を利用した
のなんだし、すつじどと思つて、まず知ら
ねふりしてれば、知しやねふりしてるほ
ど、あつちは増長して、飯食うとこさま
で来るように、ダラダラという形姿^{なり}して、
形姿^{なり}なの干している。そして皆は嫌^やんだ
くて、使つていた者は皆帰る帰ると、帰っ

て行がっで、ある時、おかたまでもいら
んねと思つて、荷一背負い背負つて、帰
らつじやもんだど。何とも仕様ない。そ
うすつど、こんどは誰もいない調子ええ
と、魚なの採つてきて、焙つていたのを
パリパリと食つてるようになっていたど。
それから、困ったなあ困ったなあと思
つていゝうちに、ある夕方、一人の男
が、

「どうか、おれど泊めて呉^くろ、おれあ
この熊を芸させてもらつてゐる男だ。こ
こ通つたから泊めて呉^くろ」

「泊めらんね」
というたの、

「なして泊めらんね」

というたらば、

「こういう魔物というんだか、何というんだか、とにかく泊って、お前だに魂消らせるようなことあつては困つから、何とも仕様なくて、おれあ見ねふりしているど、なんぼも増長して、こういう者、家まで来て、雑魚焙りなどして食つていつこんだ」

「それは珍らしいごんだ。なじよなだ。

おれはそんなこと見つたいもんだから、泊めて呉ろ」

と。

「そんじや、そういうことでええごんだ

ら、泊まれ」

と、泊ったところが、朝げに火焚いたところが四五匹の魚持^{たが}つて来て、焙り方して、焙つたの、うまいとていた。そうしたところが、熊はその岸の方に寝つたつけあ、行つてまず、そのカオスの頭ぐらすけだ（殴る）ど。こんどはあつちでもくらつけだり、くらつけらつたりしつたけど。とうとう熊に負けてはあ、魚とらつて逃げて行つたど。そしてこんど、その次の日は飯食つて、熊とその人は帰つて行つたど。そしたばカオスはまた来て、

「じいさん、ひどい猫は来たもんだな。

おれは魚はみな食う。おれどこ、まず叩

いたりして困った者来たっけなあ」

と、こういうことだけだ。

「あれは、ここさ住むというて来たなだ。なんぼ子どもつれて来つか、ここはあれに占領されつどこだはあ」

というたば、「はあ」と聞いただけあ、「さようならすんなねはあ、こりや、じいさん」

と、それから来なくなつて、とうとう熊に負けてしまったど。

こんどはみんな喜んで、また繁盛したど。熊に助けらつた話。

二人兄弟

あるところに、男の子二人いて、親さ尽されるだけ尽したもんだから、錢もなくなつて、親がとにかく生きらんね。

「おれが皆使いはたしたげんども、蔵の中に宝物が入っている。その宝物を分けて、お前だ智恵をもつてその宝で、どうにも暮して行け」

兄に石の臼をくれて、弟にはヒョウタンと棒をあずけたそうだ。そして親は死んで、親の葬式終して、

「おらだ、宝をもらつたから、智恵でええあんばいになれと、親から言わつじや。

おらだ、なんぼ智恵あるか、おれはこの
臼背負つて行くし、お前は棒とヒョウタ
ンを持つて旅して、なんなもんだか行つ
てみたええんねが」

と、こういう風に語つて、二人は朝出
きて、そして山を越えて行つたところあ、
兄はこの道さ行き、弟は左道を行つたど。
兄の方は、山越え野越え、山越え行つ
て山の途中で暗くなつた。

「さあ、こんど里に出きるまで容易でな
い、まず木の上さあがつて泊つかなあ、
臼をここに置いてここに寝つじど、臼な
の親にもらつたの、盗まれつどわるい。
何わるい者なの来ないざあない」

と思つて、木の上さ臼背負つて登つて、
ええあんばいに、臼とわれと寝ていたど。
そしてところが、何か夜中に火焚く者い
たど。そして丁度その下さ火焚かつたも
んだから…。

そして今度、四人集まつて錢分けたつ
たど。これは盗賊だな。親方はまず、た
だそこに火焚いてて、

「錢別けろ、おれどさもつといっぱい分
けろ」

というごんだけど。まず唯居て、そこあ
なんぼ親方だつて分けることはできない
と、片一方はいう。

「おれ教えたから、それくらいなことさ

れるもの分ける」

というごんだけど。そしてその親方と喧嘩始めたど。そうすつじど、片一方の方では、喧嘩してどっちか負ける風だったら、おれはこの金を持^たって行くべというような風だけし、片一方どっち負けつかなあ、こりや。と思つて、首をまげて見^みつた風だけど。そしていう内に、その木さ、ドダエン・ドダエンとぶつつかつて喧嘩して、ぶつつかったところあ、臼は落ちて来て、喧嘩して下になつたりして転んでいた頭さ、落ちて来て二人とも死んだごんだど。そしてところあ、二人が魂消^{たま}えているうちに、小便、知らず知ら

ずむぐつたごんだど。

そしてところが、火が消えて、煙は上さ上がる。して、アクシヨ・アクシヨして、ドダリ、そこさ落ちたど。そして、
「これあ、天から石は落ちて来る。雨は降る、化物は落ちて来る。おらだなじよになつか分んねから、さあ逃げろ」

というもんで、二人は逃げだど。

朝になつたら、歸つて来んべなと思つていたところが、その気色はない。それから上衣を脱いでその金をみんな集めて、家さ歸つて行つて、

「これはこれは、おれはこれで成功だ」
と思つて、家さ歸つて家を建て直す、

そしてこの弟の方は、ええ道だなあと
思つて行つたところが、墓地さ入つて
行つたど。

夜になつたもんだから、墓地さ寝て、
石塔を枕にしてたところが、夜中に「オ
イオイ」と起こす者がある。起こさつた
から、目覚まして、人間の声だなと、チヨ
イとそこで氣付いて、

「こりや、何されつか分んねから、おれ
は人間でないと答える方がええな」

と、頭さ考えたもんだから、

「おれは人間でない」

「そうか、手寄こしてみろ」

といわつたから、こんど棒を突出した

ら、

「ほほう、随分にむかし死んだもんだ
なあ、随分に細くなつていたなあ」

というもんだげんど。こんど、

「頭突出せ」

というので、ヒョウタン突出したば、

「ほう、全く、なんぼ久しいもんだかな」
というごんだけど。

「ほんじゃらば、おれあまず、ある村の
役人の娘の魂抜きに行くところだ。ほじゃ、
おれにお伴しろ」

といわつて、

「あまりええ」

と答えたど。そして、

「しつかり握れよ、その棒突出すから……」
というたところあ、なんだか風船のよ
うな心したけずあ、ふうつと飛んだかと
思つたところあ、町役人の門のところさ、
ぽいと落さつただけど。そして、

「この門さ入って行つて、おれは魂を抜
いて来つから、待つてろ」

といわつて、そこにいたところあ、

「この袋は魂だ、お前はまた人間に返り
たいときには、魂で返ればええし、また
この魂を入れれば生きるし……」

と。

その話は夢だかと思つてゐるうちに、
話語つたものは見えなくなつた。そのう

ちに、この家の中で叫び声はする。泣き
声はする。ヤアヤアヤアヤアという音は
する。

「さあ、やっぱし、娘は何かになつた
な」

と聞いて、そのうち医者が呼ばれ、な
にやかやと、医者が簞などで来るといふ。

「ここにいては本当でないから」

と思つて、少し向うにいて、様子を見つ
だそうだ。

「とにかく医者は分んねえ」

という話が聞えたど。そうすつじど、

「おれが生きつだし、あれさ生き返らせ
る方法はこの袋だべがら、おれは医者

なつて、生き返らせてみんべな」

と思つて、その袋を持たがつて行つて、

「おれが名人の医者だ」

と、外にいた男さうたところか、

「御主人さ聞いて来る。こういう娘は死んだそうだが、おれは生き返らせる名人の医者は聞きつけて来て下さったからどうだ」

「ほんじゃ、早く、まず寄せろ」

というもんで、寄せた。

「ほんじゃ、娘寝つだどこさ誰も入らねでもらいたい」

といつた。そしてその袋を口にさして、
「さあ、早く生き返ろ、早く生き返ろ」

と、袋の空気をつめるようにしていた

ところが、段々と、手押えてみつど、手は温かくなる。そして目ぱちちり開いて、

「なんだべな」

なんていう。誰もいないようだし、台所で随分に人もいたようだなあ、なんて、すぐ音立てつだど。

「こんどは大丈夫だ」

それから今度、みんな呼ばつて、生き返つたからと喜ばつて、

「こんな先生はいない。ほんじゃらば、何もお望み次第のこといつて呉くろ」

といつたところあ、

「おれはこの娘欲しい」

と、こゝう言つたど。そう言つたところあ、
「娘とて、外さやることできねから、ど
うかここの聳になつてもらいたい」
といわつて、その家の後継いだど。

長者と太郎

ある長者さまに、なかなか正直なええ
男がいて、御主人さ、うんと仕えのええ
男だつたど。そして、その男は太郎と名
付った者だつたど。

「太郎来い」

と、お茶飲みに招ばつて、
「こんなええ世の中は平和で、そつち

こつちで親類を招ばつたりして、酒を飲
んで楽しんでゐるという話だから、おれ
どこでも親類の方々、友だちでも招ばつ
で、酒でも飲むかなあ」

というたら、

「それあ、ええごんだなあ」

「しかし、何をみんなに上げたらええか、
末広がりでも買つて、それで舞でも舞う
ように、末広がりでも買つて来たらええ
かなあ」

というたらば、

「そいつはよかんべな、旦那」

といつて、

「ほんじゃ、京都さ行つて、末広がりで

も買つて来てもらわんなねなあ、十貫やるから、要の頑丈^{かなめ}なの、柄の丈夫なの、紙のええので模様の書いたのに、松竹とか鶴亀とか、ええ絵でも描かつたの見て来て呉ろ」

と。そいつあええ、京都見物したことないもんだから、喜んで錢もらつて尻はしよつて、タンタンタンタンと出かけたところあ、いや見たことのない京都をまづ見物して、探したげんど、末広というものは、なじよなもんだかも、よく聞いて来ないので、何とも仕方ないから、
「末広というものを売る店はないか、末広を売る店はないか」

というて、ずうつと自分が言うて歩^{ある}つたど。そうしたところが、商人はそれを見て、

「田舎から、こりや末広を買いに来たもんだ。おれが騙して、これはええ」

と思つて、

「おいおい、何買いに来た」

というたところあ、

「おれは末広がりというものを買つて来いと、旦那に言わつたげんど、売る店あなくて、なんとしたらよかんべ。どこかに末広を売る店あるかと、こうして聞いっただどこだ」

「おれあ家には、いっぱいあるから、家

さ行ってみろ」

と、こう言わつで、連てつたど。そうしたところが、唐傘を見せて、

「こういう風な、なんだ。まず話してみろ」

というたら、

「要のみつちりした、柄の頑丈な、紙のええなで、絵のええなだ。と、こう言わつで来た」

「はあ、おらえんのは、この柄というのは、何日も磨いたツルツルした頑丈な柄だし、この要も頑丈だし、開けてみつど末広がりだし、紙もポンポンと叩くと音がするええ紙を使ったのだし、これを旦

那に持つて行つて見せたらば、大喜びされる。これが末広というもんだ」

と教えらつじやど。

「これは仕合せなことだ」

というもんで、

「なんぼだ」

「なんぼ持つて来た」

「十貫だ」

「それでは、それでよし」

と喜こんで、

「ああ、うちの御主人だつても、面白くなくて不機嫌なことあるべ、そんどき、この唄さえも唄うんだら、誰もごしやぐ者はいない」

男はうんと喜こんで、尻はしょって家
さ来て、

「旦那さま、旦那さま、ええ末広がりを買
つて来た」

と、その末広がりを背中さ背負つて、
旦那さまさ、これだと見せたところが、
「太郎や、これは唐傘というもんだ。台
所にいっぱいある。お前見てこい」

それでも、

「これは末広がりというもんだ」
騙さつたのを信じてるもんだから、言
うたど。

「なんだ、こんなもの」
と、旦那は不機嫌になつたど。

「こんでも、旦那さま、この柄は何日も
磨いてツルツルにする柄だし、要もぎつ
ちりしつたし、紙もポンポンと叩くと
音あする紙だし、これは最上の末広がり。
こう開いてみると、末広がってる」

と、こう説明ばりして、この御主人に
決して答えねがつたど。そうすつど旦那
は扇子を見せて、

「こういう風ななの大つきなだごで。絵
を描いたので、舞を舞ったりするのを
買って来いというたのに、聞かないで……」
そしたば、男は何というても聞かない。
「本当に騙さつたつて言うのは、こうい
うことだべな。そんなこと語るんじや、

家さ置かんねから、出て行け」

と、主人に言わっただと。

「お前にそれを呉れっから…」

と、台所さ行つてみたら、本当に唐傘
だったずもな。しまったと思つたげんど
も、旦那に出て行けと言わっただんだし。

そんなとき、ちよつと思つたことは、

春日さまのうしろの山は

笠に似ておる三笠山

ある日 神さま申された

人みな笠をさすのやら

わたしも一つ傘さして

みんなの上にさしてやれ

本当にそうだよ おめでたい

というもんで、傘をさしながら、踊り

おどつてトントンと叩いて踊つて行くと
こを見て、

「ああ、面白い」

と思つて、「太郎、帰れ帰れ」といつて、

「ああ、おめでたい、おめでたい」

旦那さまの上さ傘さして、そしてメデ

タシ・メデタシだったど。

金が蛙になつた話

貯めるばり面白くて、おかたの頭さも
油つけらせねで、働いては貯めしている
男がいて、ある時甕いっぱい金貯めつた

から、その金を人に見つけらんねように貯めて、

「人に見つけらつた時には、蛙にでもなつて見せろよ」

ということを、金さ語つて、埋めてその上さモク掛けて、また毎日毎日、働いていろいろなもの売つて来ては、金貯めてる男いだつたど。おかたに着物買つて呉ることも知しやね、頭さ油つけらせることも知しやね、ただ貯めて置くばりなもんだから、ある時、山さ働きに行つたときに、いっぱい蛙をとつて来て、おかたはその金の代りに、いっぱい蛙をつめておいたど。そしてじいさんとこさ、

「おれあ、町さ行つたとき、とうし、金を出さねど、世の中見たくて蛙になつたり、いろいろになるといふ話聞いて来た。おれの旦那さまは、そげなことしてえんまい」

なんていうような、オドケ話語つたところが、

「ああ、おれのも、そげなことなつてゐるんであんまいな」

と思つて掘つてみたら、やつぱし蛙になつて、ピンピンピンピン。

「いや、おれだから、蛙になんなよ、おれだから蛙になんなよ」

というたげんど、ピンピンピンピンと

みな跳ねて行かったど。

「いや、本当に変だ。おかたのことも信じなくてはなんね」

そしてところが、そういうことになったという話。んだから貯めるもええげんど、世の中さ金というものは出はって、使ってもらったりいろいろすつじど、喜んで蛙になんねげども、土の中にばりいたくないから、そういう風になったから、楽しみも金だし、喜ばせるも金だから、金を使ったって、金は使っただけ入って来るもんだって。そうおかたに教えらっじやど。そしてそういう風に使ってみっど、そのおかたは使っただけ、錢をポロ

リポロリと入れて呉っじやど。その人も喜ぶという、金も使えば使うほど貯るもんだという、真人間になつて楽しんだという。錢は使わないで貯めるばり能でないという話。

兄弟と貧乏神

むかし、二人兄弟が親に死なつて、親は財産二人で分けて、みんな安泰に仲よく暮せよと、そして親の死んだ後で財産を二つに分けたところあ、弟の方は子どももないで貯めるいつそう…。そして兄の方はというじど、子どもいっばいで

きて、働いても働いても難儀していんな
ね、何とも仕様ないから、弟さ行つて願つ
て来つかなあと思つて恥をしのんで行つ
たところが、

「おれが誕生日は何時^{いつ}の何日^{いつか}だ。そんな
き兄は来て呉れたらええでないか」

ぐいと坐つて、

「そうだなあ」

というて歸つて来て、おかたさ話した
ところが、

「行かねでもいらんねごでな」

と、おかたは他から着物なの借りて来
て、二人で行つた。まず他の人なども
招んで祝いをした。その兄は貧乏して

るもんだから、見ないふりして、他の人
さばりそれそれして、恥かいて、なんぼ
兄弟だつて情ないもんだ、なんぼ貧乏し
てつど、こういうもんだと思つて、来る
途中で、

「おれは貧乏の神だ」

という音する。

「あるところには、あまり働いて、ぶつ
つからつたりなどぼりすつから、そこに
いらんねくて、福の神のこと聞いた。福
の神は山のところにいっぱい宝を埋めつ
だということ聞いた。こんどはお前が
たどこから離つて行かんねくなつた」
と、目に見えないげんど話が聞えた。

「子どももいっぱい育おがしたんだし、おれもどこさか行かんねあ」

そしたところが、

「おいおい、福の神の場所、教えて呉ろ」

といったところが、見えないげんど、知らず知らずその山の方さ行つたど。そしたところが、そこに岩あつて、岩を開けられるような氣持したけど。んだからその岩さどんどんして開けてみたところが、やつぱしいっぱい宝の金銀入っていたけど。

「貧乏の神も、この金を、まず見てみろ」

というて、その金を集めて、貧乏の神が入つたと思つたとき、バエンとその

蓋ふたして、わらわらと逃げて来たど。こんどは子どもにだつて腹くちくさせて、ほがえに人や兄弟さ頭下げね。あがえな兄弟なんざあるもんでない。それにつけても、まずおらだ働いて漏むつたどこの家を拵えたり、いろいろして、こんど安泰になつたど。そうしたところが、弟は子ども持たないもんだから、兄どき来て、「まず、ええあんばいになつたなあ、あんだ働いたから、こつちう風にええぐなつたなだ」

と、いろいろな話を語つたところが、「福の神や貧乏の神などあるもんだ。おらだんどこさ貧乏の神喰付いていらんね

と、こういう風なとこ教えらつたど。まだ山に残っていたかも知れねげんなあ、金は」

というたところが、弟の方は金銀残っていたと言わつだもんだから、「兄、教えろ」と入って行つたところが、貧乏の神に抑えらつて、今度はドンドン弟が貧乏の神に喰付かつたど。

んだから、人は助けられつときは、お互いだど。

親 孝 行

あるところに、孝行な子どもがいて、

親さ一生懸命で尽されるだけ尽してみたいと思つていだど。父親は先に死ぬ、母親は病気で働かなくて食^かんねくなつたもんだから、近いとこの、ある旦那さまさ、親さ時々伺われるようお願いして、勤めていたところが、そのおつかさの病氣も治んね。会う人、会う人に、

「何かええ医者はないか、ええ口言わねえか、親が死ねば、顔見らんねくなるのだから、一日も半日も長く親生かしておきたい」

と思つていた。ある人に、

「こういうところに、ええお医者さまがいて、その人の薬飲んだらば、またマメ

になられつかも知んね」

と、こう教えらつじやど。そのことを

旦那さま話したところが、

「お前には病人がいる。行くわけにも行かないし、来てもらうには相当な銭もかかる」

「ほんじやらば、医者さ行つて話をして、医者に薬をもらつて来てみたらどうか」

と、旦那さまは言つておくやるもんだから、

「一年分、錢をお借りしたい」

というたところが、

「ええとも、ええとも」

と、一年分の薬代にするの頂いて、そ

して峠越えして、ようやく着いて話したところが、

「ほんじやらば、遠くから来たから、早く話を聞く」

といつておくやつたから、その話したところが、

「んじや、三日分の薬やつから、その薬で治んねじど、考えもんだから……」

と、その薬をいただいて来て、また山に通りがかったところが、

「助けて、助けて」

という音がする。しかし一時も早く行つて薬飲ませたいもんだな、入つて行かね方がええかなあと思つたげんど、助

けて、助けてという声するもんだから、行つてみたらば、虎に向わつて、その人は太い棒で向つていたげんども、太い棒嚙らつて、何とも困つていたつけど。その人は、

「この棒持^たつて呉ろ、虎さ向つて行んから」

と、こういう風だけど。ほ・で・に、そうかと薬を風呂敷がらみ置いて、棒持^たつて、身構えしたところが、その風呂敷包み持^たつて逃げたど。そうすつじど、こんど「しまった」と思つて、

「薬、親さ飲ませたいもんだなあ」

と叫んで、夢中になつて、本性なくなつ

たど。そしたところが、目覺ましてみたらば、虎がいなくて、

「助かった」

と、薬探ねに降つてみたところが、血が落ちていたど。そしたば、風呂敷を投げて、その者は虎に殺さつていたど。

親孝行の者は助かるし、悪い者は虎に殺されだど。んだから心持ちのええ者は助かるもんだど。

折　れ　秤

正月の二日の日は、前から店開きだったべな。鴻池の店開きのとき、秤の

一番大切な折れだったど。その旦那は、
「いやいや、おれは商人はおさまった。

秤折れるなんつあ、ないもんだ」

といつて、おかたさ言うたど。

そうしたば、賢こい女だから、

「旦那さま、吉相、それはええことだ、

これはよかつたな、大阪では、折れ秤と

鴻池は一番になるしるしだな」

と、こういう風に言うたど。旦那は喜

んで祝つて、それから大したことになる

たど。

吉 相

商人している、ある一軒の旦那は、

「昨年損して、今年はどうだかな」

と、外さ出はつてお空を眺めて、顔洗

うと思つたら、鳥は飛んできて、糞、

頭さひっかけらつた。

これもがっかりして、

「いやいや、昨年もあの通り、朝げから

こんなことになった」

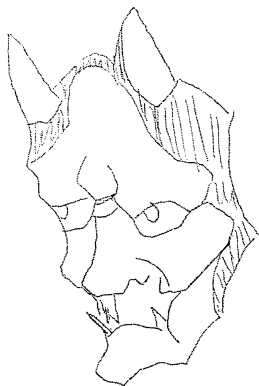
というもんで、その旦那もがっかりし

て話したところが、おかた、

「あらら、吉相、ええことなつし、昨年

の損もとにかえし、ええがったことなあ」

といわつで、それからもうけたど。



むかしむつかえつて

話ははじけて

昼間むかし語つど

梁の上のねずみに小便ひっかけられつど

そして

その小便 まなぐさ入つど

めんめんめっこになつど

そうすつど

さっぱり目が見えなくなつど。

んだから

昼間むかし語りざあ

するもんでないけど

どーびんと。

(工藤六兵衛)

白鷹における

昔話の伝承とその周辺

こぶしの花が早春の山に咲くと、世界が一変する。重い雪をかぶった長い冬の忍従の生活が終ったという解放感を一度に味合う。しかしその解放感はそのまま叫びには結びつかない。こぶしの分厚い花びらのように、ある重さをもって少しずつ、しかも確かな形で心を解き放って行く。

白鷹を歩き廻ると、いろいろな石碑石塔が建っていて、よく目につく。太宮子易塔や庚申塔や十八夜塔であったり、巳待塔・月待・文珠・湯殿山塔であったりする。またあちこちに地藏が建ち、小屋がけしているものがあり、願主は赤い布で作った乳型を供えたりする。そして部落のはずれには道陸神や山の神が祀っており、大きなノサがぶら下っていたりする。外見はいかにも自然そのものでも、どんな場所・どんな草

木の一本一本にも、ともかく村人の手あかや足跡が残されているといった風で、自然を恐れながら、自然を尊んでいる姿が、そこにはある。そして秋になると、村には、あちこちから訪れる者があつた。越後から「越後瞽女」^{ごぜ}や筋子売りが入つて来たり、秋田から箕売りが、富山から薬売りがやつて来たものだったという。それにもまして飯豊山の山伏、朝日山から行者、遠く出羽三山からも山伏が来たり、尼さまや陰陽師や六部のような人たちが入り込んだ。遊芸では、高玉芝居と呼ばれる若衆芝居（歌舞伎）が育ち、祭文や説教師がまぎれ込んで来ることもあつた。また商人の中にはこの地域から他地域に出かける者もあり、文化交流の先達であつたかも知れない。「マユ商人」「青芋商人」「材木問屋」などであり、一時は「桑商人」や「植木売り」などもかなりあつたという。中でも「青芋商人」は新潟の小千谷に早くから取引を結んでおり、「材木問屋」は最上川の筏と共に酒田まで販路を伸ばしたものである。

昔話に限って言っても、

「越後では」とか「越後の人は話がうまい」「越後の人は唄ばかりでなく、話もうまい」などといったものだという。越後との交流はかなり古くから、太い線で見られるも

のようである。他地方の伝説なり昔語りなどが、「むかし」ということで、白鷹地方の人々に記憶に残されていることから見ても、その点での白鷹の立場といったものの位相が、ある程度理解できそうに思われる。

この地方の昔話や伝説などの口承文芸に光を当てた最初の著作は『牛の涎』全五十巻であろう。長井市の蘭医でもあった長沼牛翁は、長崎に遊び、医学の研究のかたわら、音曲にしたしみ、自ら粹人を称していた。この著作の中に置賜各地の伝説などを記しながら、他の地域のそれと比較したりしている功績は大きいものであろう。しかし口承文芸が民俗の中で意識されないままに、今日に及んだのは、残念なことである。

柳田国男先生の山村生活の調査や「昔話研究」などの民俗学的研究の資料として、最上地方から庄内地方のものがいくつか紹介され、研究の対象となったが、その折にもこの置賜地方は眠り続けた。そしてそのような学問的な意味で初めて取り上げられたのは、戦後における国学院大学の民俗研究会による中津川調査を待たねばならなかったのである。勿論この間には『東置賜郡史』や『米沢市史』が上梓され、前者には詳細な年中行事や風俗などの民間伝承が紹介され、後者には未定稿として「風俗・習慣」

「方言」などが作成されて原稿として残された。白鷹町に関しては、戦前の『西置賜郡志』に数話の方言で記された昔話が含まれ、『白鷹村史』（ガリ版）に伝説の一部が記されたが、勿論十分ではない。戦後は『荒砥町史』『十王郷土誌』『鮎貝の歴史（上）』が出版されたが、一部風俗・習慣が入ってはいいるが、昔話を意図的に考察しようとした最初のものは置賜民俗学会の昭和四十年の『白鷹町の民俗調査』であつたといえるかも知れない。消えかかっている昔話の収集は極めて困難である。時期を失したこと、大きい傷手である。しかし昔話の持つ人間性が、昔話を消えることなく残り、百話以上の語り手を見出したことは望外の慶びであつた。その一人は白鷹町貝生の工藤六兵衛氏であり、もう一人は、この海老名ちやう氏である。

昔話を白鷹では、「むかし」と呼んでいる。しかし「むかし」という場合には昔話だけでなく、伝説をも含むし、語る場合も特別な区別なしに、炉辺で語る。交流の激しかったと思われる江戸時代をそのまま、「むかし」にしているようにさえ見える。野村純一氏は、主婦権の交代における「ヘラ渡し」「財産渡し」のような形のものが家系を

通して伝えられた昔話には、同じようにあるのではないかという想定を『吹谷松兵衛昔話集』で実証しようとしていられるが、そのような例は白鷹町では未だ聞かれない。しかし語り始めや語り納めの句などを見ることによって、少なくとも村落、一地方といった単位で、一つの昔話の型があつたのではないかという想定は、十分可能であろう。

語り始めには、「むかしあつたけど」「むかしあつたど」「むかしむかしあつたどと」「むかしあつたずもなあ」が一般的で、置賜の一部には、「とんとむかしあつたずもなあ」「とんとむかしあつたどもなあ」などと、「とんと」という言葉の入るものが見られるが、これは村山地方との交流の激しかった南陽市中川・赤湯地区などに聞かれるところから見て、村山地方の影響なのであろう。

また語り納めには、「どうびんと」が多く聞かれるが、その他には次のようなものが聞かれる。「どうびんさんすけさるまなぐ、さるのまなぐに毛が生えた。けんけん毛抜きで抜いたれば、めんめんめっこになりましたけどはあ」「とうびんさんすけ、さるまなぐに火がはねて、めんめんめっこになりましたけどはあ」などが聞かれるが、白鷹

町を置賜地方まで拡大すると、「むかしとうびん、びったりさんすけ」（小国町）、「むかしとうびん、さんすけ笹巻まいたけど、ごん助きて食ったけど」（小国町）、「むかしとうびん、さんすけびったり釜のふた、灰で磨けばええ銀玉、なあさんすけふんはい」（小国町）、「むかしとうびん、河鹿の尻、つつつきそうろう」（小国町）、「どうびんと、さんすけ前で火はねて、ごんすけ前で火消した」（米沢市）、「どんびんどん」（米沢市）、「どろびん」（米沢市）、「どんびんさんすけ猿まなく、猿の尻^けつつに毛が生えて、けんけん毛抜きで抜いたれば、まあまあ真つ赤な血ができて、こうこう膏藥貼ったれば、やあやあやと直った」（米沢市）などがあり、特に他地域に聞かれない「どうびんと」という語り納めの句は、すぐれて地域的な様相を示してくれる。さらに合槌は「うん」とか「はい」とか「それから」という、先をうながす言葉が普通であって、村山地方のように声高に「オットー」というような言葉は聞かれない。それこれを考え合せても、置賜が一つの文化圏をもっていたということは、ほぼうなずけようというものである。

よく、昔話の結びの話を、一口話や、「ほら話」「ずほ話」などがある。そしてその

ような話は「果てなし話」「尻切れ話」などと同じように使われる。特に若衆などの話の結びとして使われたようで、この種の話は「どこそまでは…」という風に、例えば「馬鹿聲」話が、いつも「南の山（福島県にあるといわれる）」のといった他地域の話として語られるものが多く見られる。このような世間師によつて伝えられたか、いかにも世間師が伝えたように語る語り口の多いことも、白鷹の昔話に多いことは注目しておいてよいことではなからうか。

昔話の伝承形態を考えると、大別して次の三つの系譜があると考えられている。①は家系伝承といわれる、その家に語り伝えられて来たもの。②は部落伝承で、「おろか村話」のように、または白鷹という「南の山の馬鹿聲話」に見られる「南の山」といった部落や村落のことである。③は世間師の伝承というもので、前述したような世間師たる大工とか屋根吹・商人・行者などの持つてきた昔話である。白鷹の場合にはこの世間師によつて伝承されたものが若衆の手で管理され、木小屋（けごやと言っている）を通して伝えられて来たのではないかと想像される。各部落には月待講や日待講があ

り、庚申講の集まりで「庚申のむかし」が語られた例を、われわれは持っている。しかし若衆宿や娘宿の発達しなかったこの地域で、若衆はどのように昔話を伝承したかは、そのままこの地域の特色を示すものかもしれない。月待や日待・庚申など、更には契約講などは男の講であった。観音講や念仏講は老年の男女の講であった。嫁としては大宮講があつたが、未婚の男女のものは、社会的に公認されたものはなかった。しかし、男の若衆には、それぞれに家の作業小屋である木小屋があり、そこで雑談がよく行われたという。そして、半ば講のような性格さえ認められていた。しかも部落の定宿のような木小屋があつたという。木小屋が話の中にも描かれているものには、高畠町を中心に流布している「佐兵ばなし」に代表されていると見ることができ。また小国町に今も見られる若連中契約に現れている「触休み」の中で、やはり若衆の仕事が悪天候などで休みになったときには、誰かの、集まり易い家で腕相撲などをやりたりして遊んだものだともいう。他方、女の場合には、嫁講としての大宮講の場も話し合いの場であつたろうが、海老名ちやう氏によれば、近所のお針の師匠のところまで聞いたものも多いという。秋の刈り入れも終り、冬仕度も終ると、お針子に出かけ、

お針を教える場所は部落に少なくとも一つぐらいずつあったという。従つて十二月の初めの「針供養」などは盛大に行なわれたようであり、この「お針子」は部落の大部分の未婚の女性の一度は通らねばならなかったものではなかったか。そんな意味で、娘宿の如く考えられたものかもしれない。これは女の場合の木小屋に当るものであつたらう。そんな意味で、このような一群に「木小屋話」という名をつけてよいのではなからうか。

その他に、年中行事と女系昔話の関係も考えてよいのではないか。海老名ちやう氏の「大黒さまの話」や「月の中の兎」の話などは女系の昔話として重要な位置をしめているのではなからうか。

ともあれ、白鷹という風土の中で語りつがれて来た昔話は、一種の特色があるといふことがわかる。勿論昔話の町の中でのひろがり調査したわけではなく、百話以上の語り手が、その他にもいられるかも知れない。そんなことを考えながら、今迄の概括的な調査の結論としたい。

昭和四十四年一月

あとがき

海老名ちやうさんを訪れた日は、十二月の暮れもおしつまった二十八日であつた。第三集の編集についても、奥村幸雄氏の多大の御助力を賜つたし、海老名正二氏、海老名伊都氏にも種々お世話になつた。更にちやうさんが百話を語つて下さることを心待ちにして下さつた方々の陰の援助がなければ出来なかつたろうことを、改めて感謝申し上げる次第です。まだまだ語り残したものもあるようで、四集・五集をも読者の方々とともに編者としても期待してお礼の言葉としたい。

続々 牛方と山姥

海老名ちやう昔話 第三集

昭和四十四年一月十五日 発行

編者 武田 正

山形県南陽市三間通二三二の三

山形短期大学民話研究センター資料叢書

続々 牛方と山姥

海老名ちやう昔話 第三集

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十年一月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』

（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）

『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』

(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)

『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)

『お婆の手ん箱 (一) 阿部キヌオさんの語り』

(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)

『及位の昔話 (二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)

『及位の昔話 (三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』

(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)

『続 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』

(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)

『続々 牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』

(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)

『牛方と山姥 (四) 海老名ちやう昔話 第四集』

(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)